

どてらい男^{ヤツ}

立売堀界限 〈第1巻 立志篇〉

いんちき

花登 筐

どてらい男^{ヤッ}へ立志篇^ン

著者◎花登筐

発行者徳間康快

本文印刷株式会社金羊社

カバー印刷真生印刷株式会社

製本所明泉堂

発行所徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇

電話代表(四三三)六二三一

振替東京四四三九二

郵便番号一〇五

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。 検印廃止

75H10bf

花登筐

どてらい男^{ヤツ}

立売堀界限

〈立志篇〉



徳間書店

どてらい男^{ヤッ} へ立志篇 目次

下 ^{しも} 丁 ^{でう} 稚	9
自立の思想	19
露骨な敵意	29
柿のタネ	39
偽電話	49
募る不安	58
復讐の波紋	68
上に立つ者	78
夜間中学	87
背広の中学生	96

芸妓の思惑	106
竹田の折檻	115
減俸処分	125
だらめ！	135
老巡査	145
苦肉の策	155
職員会議	164
狼と美女	174
水風呂	184
裸同士	193
意地の代償	202
墜落	212

運命の使者

滾る決意

売れた！

240 231 222

装幀・挿画／三井永一

この小説は実在人物をモデルにしていま
すが、多少のフィクションを加えてあり
ます。

筆者

立売堀界隈

どてらい男

ヤッ

へ立志篇

下丁稚^{しもでつち}

1

どこかで、船の汽笛が鳴ったようである——。
この大阪に、船と名のつくものがまだ残っているのが不思議なほどに、この町は痕跡もなく焼けて失せていた。

いや、目の前に濁った水を流すこの馴染深い堀がなければ、恐らく、この界限を立売堀^{いたちまほり}だとはわかるまい。

なるほど、小さなブラック建の家は建っていた。建つてはいたが、そんなものは目に入らないほど、昔日の立売堀界限は消え失せていた。

「わやにしまった！」

さっきから小一時間も、夕昏れの立売堀を背にして、この界限を見渡していた小柄な男が、

はじめて呟いた言葉がこれである。

いかつい肩に、進駐軍のリュックサックを背負い、太い首から上の大きい頭に、ちょこんと戦闘帽が乗っていた。

いわずと知れた復員兵である。

やがて男は、立売堀の流れを見ると、立小便を始めた。

年齢は二十四、五歳、日焼けしたというよりは黒光りした顔は、南方からの復員兵だろうか。いや、南方の引揚兵にしては、まだ還るのが早い終戦後一年目の昏れである。

小便をすませた男は、武者震いを二、三度すると向き直つて、ギョロリと眼を光らせた。

背後で話し声が聞こえたからである。

話し声の主が二人、声高に近づいて来た。

黒い皮のジャンパーの男と、もう一人は毛布で造った半オーバーの男である。

一眼でわかる闇屋の正体すらわからぬのか、

復員姿のこの男は、

「前戸はんの店は、どこや？」

と、いきなり聞いた。

闇屋は顔を見合わせる。

「前戸文治商店、知らんのか？　それで、よう立売堀歩いてるのう」

二人の闇屋はもう一度、男を見ると、顔を見合わせて、返事もせず気味悪そうに、足早に去って行った。

それもそのはずである。

その男の襟に、終戦からこっち、減多に見られぬ階級章がついていた。

しかも、片一方は金ベタの陸軍大将、片一方は、星一つの陸軍二等兵である。

これでは、顔を見合わし、薄気味悪く思ったのも仕方がない。

大将と二等兵の襟章のこの男は、もう闇屋のことは忘れたかのように歩き出す。

「川が、こっちゃとするわい。すると、ここいらが北屋はんか？　いや、川島はんか？　するとやな……」

また、独り言をいいながらも立ち止まった男は、ひょいと声をかけた。

「なあ、前戸の店はどっちになる？」

声をかけられたのは地蔵であった。しかも、錆びてはいたが、鉄で出来た地蔵であった。

立売堀は、鉄問屋の町である。

船場井池どいけの織維問屋、薬の道修町、菓子玩具の松屋町、既成服の谷町、材木の小林町、西横堀の瀬戸物、八幡筋の道具、安治川筋の石炭、うづほ靱の海産物と、大阪を代表する問屋の町と並び称せられて、ついこの間までは、六百軒に及ぶ鉄鋼、機械器具の問屋が、軒をひしめき合っていた。

とはいえ、鉄の立売堀の歴史はそう古くない。機械器具のほとんどが、輸入で占めるもので

あるからだ。

立売堀の堀は、元和六年から寛永三年にかけて大阪三郷総取締突喰屋次郎右門なる町人の手により完成されたという。

船場を囲む四つの堀のうち、西横堀より分流して、江の子島の南端で百間堀川と木津川の合流点に入る長さ十一町三十六間半、幅十間、後に八軒堀となった。

立売堀なる語源は元々、阿波座西村家の所領の土地にて、新町遊廓の出来た際、割売りしたので断売堀、居断堀となったというが、一説には、慶元戦争の時、伊達家の陣所になって要塞の堀切をした跡を、掘り足して川にしたところから伊達堀と呼び、いだて堀がなまって、いたち堀となったともいう。

だが、材木の立売市があったところから、立売堀と書かれ、呼び名だけがいたち堀のまま残ったというのが正説のようである。

元々、材木の立売があったところから見ても、江戸時代から明治へかけて、立売堀は材木問屋の町であった。

昔日の材木問屋の商いは、問屋に有利な商いはない。

山元と称せられる山持ちから一山の材木を仕入れ、その仕切値は事前には決めず、決めるのは年一回、問屋で材木が売れた後、山元が問屋を訪れた時である。

問屋は、早急に値を出さず、飲めや踊れやの大尽遊びをさせて、有無をいわさぬ時を見て、へ今年は、これこれこれだけに売れましたので、仕切はこれだけで、と値を叩く。

女と酒にすっかり酔わされた山元は、首をタテに振ってしまうのが常である。

こうした商法の材木問屋の傍には、必ず花街や遊廓が生まれた。

深川には、羽織芸妓の深川や築地、立売堀には、松島、堀江の廓くわ、夕霧、伊左衛門の新町の廓である。

だが、明治に入ると、材木問屋から金物問屋がとって代わった。

日露戦争と共に、鉄鋼の需要が増加され、安治川、川口方面より船で輸送されて来た重量物が、立売堀で陸揚げされたからである。

機械工具の類は、米國ホーン会社からはじめて輸入したのが明治中期、さらに、第一次世界大戦後にはドイツ品が進出し、米、英、独の輸出の新市場として日本へ、否、立売堀に向けて殺到したのである。

米國オスター会社のオスター、グリーブランドのドリル、英國トーマス社のハンマー、米國モンクリーフ社のゲーシグラス、ダビスのエメリークロス、スベアー・ジャクソンの木工用鋸のこ、独のクリンゲンバームのドリルやマイクロメー

ター等々も、はじめてこのころ、日本に姿を見せた器具である。

だから、その商いもハイカラだった。

歩いて東へ十五、六分の船場では、前掛姿の丁稚ていぢが両手を揉み合わせながら、

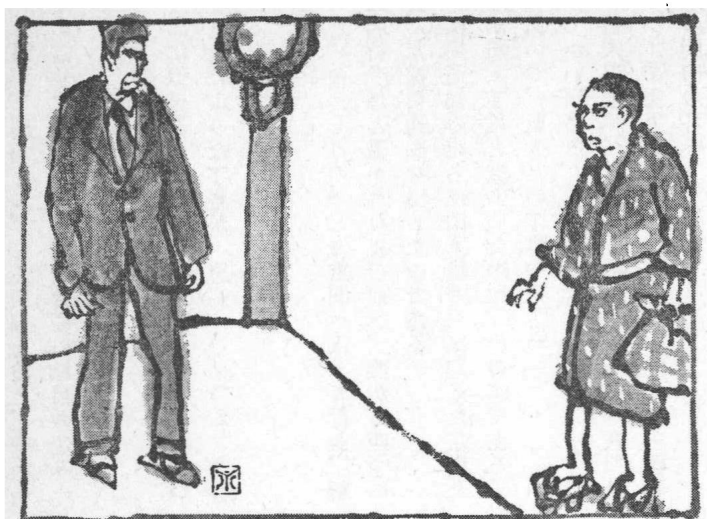
「毎度おおきに、おいでやす」

と、客に茶をすすめ、商いなんて四、五年は及びもつかず、せいぜいが、大八車で配達だけという時に、厨子前掛姿の立売堀の丁稚は、

「なんに致しましよ。へえ、グーデルブレストですか？ 五円でキャッシュ・オン・デリバリーです」

と、もう商売をやらされていた。

しかし、いくら立売堀でも、十五歳の少年に販売を任す店はなかったろう。だが、任された男がいる。しかも、十八歳で主人の三倍の売り上げを上げて、立売堀界限をアツといわせた男である。



山下猛造——。大将と二等兵の襟章をつけたこの男である。

働いていた店は、先刻から探している前戸文治商店である。

2

前戸文治商店も、大正十五年に開店した立売堀でも一流の、機械器具問屋であった。

主人・前戸文治の出身は福井県——。

その同郷の福井県から二人、新しい丁稚が採用されて入店したのは、昭和十年三月三十一日のことだった。

その朝——。

新入の中学校を卒業した中学丁稚でさえ、緊張と興奮の面持で、父兄に付添われて最敬礼をしながら、ぼつぼつと前戸文治商店の玄関に姿を見せかけたころ、表に一台のタクシーが止まった。

丁稚が、客かと恭しく出迎えると、中から
紺の着物に兵児帯、下駄履き姿に風呂敷包み一
つという小柄な少年が降りて来て、

「ここは、前戸文治商店か？」

体に似合わぬでっかい声で聞くのを、狐につ
ままれたような丁稚が、思わず、「へえ」と答
えると、

「ご苦労」

と、のっしりのっしり玄関へ入って行き、新
入店員受付と書かれた机の前へ、懷から四つに
疊んだ採用通知を出したのである。

採用通知の宛名は山下猛造、出迎えた丁稚た
ちが新入丁稚と気づいたのは、その時である。

「あいつ、新入りの丁稚やぞ！」

「でかい顔さらしやがって！」

新入丁稚が、あろうことか、たった一人でタ
クシーで乗りつけたという話は、すぐに一番番
頭の岡田の耳へ入った。

岡田は、眉間に皺を寄せた。

それだけでなく、主人の前戸は勤勉で質実、
前戸魂なる精神を店員に植えつけようとしてい
る気性の持ち主である。

新入丁稚が、一人でタクシーへ乗って来たと
主人の耳に入っては、即日解雇は免れるまい。

とに角、その前に事情を聞き、弁護の余地あ
らばと山下猛造を呼んだ。

猛造は、のっしりのっしり事務所へ入って来
ると、

「呼んだのは、あんたか？」

奥にまで突き通るような声で、自分から話し
かけていた。

「山下猛造君だね」

「ああ、学校ではモウさんと呼ばれてた。モウ
は牛のモウじゃ」

「君は、一人で来たのかい？」

「いや、親父と一緒にじゃ」

「お父さんは、どこにいる？」

「一緒にここで働く尾坂という奴と、大阪駅から歩いて来よる！」

岡田は、驚いた。

「すると、君は父親を歩かせて、一人でタクシーに乗って来たのか？」

「ああ。親父は福井で、やめえて叱りよったから、一人で乗って来た。その代わり、タクシーの錢つくるために、入場券で大阪まで乗って来たんじゃ。車掌が切符調べに来よるたびに、便所へ入って、クソうてクソうて……」

猛造は、着物に鼻を当ててクンクンと嗅いだ。

岡田は怒る前に、何故か庄倒され、

「お前、よう入場券で出札口を出られたなあ」

と、こう聞かざるを得なかった。

「ああ。『うしろ！』と大声でいうたら通してくれよった。親父は困った顔をしよう。ひょっとしたら親父が、払いよるかも知れんう。」

ありや、前という方がよかったな」

猛造はそういうと、いかにも嬉しそうに笑ったのである。

つい、岡田も、釣り込まれて笑いそうになって、あわててこらえた。

岡田にも叱り方はあった。

「君は、この前戸商店の新入丁稚として、お店から汽車賃を貰って来たんやど！ そんな行為は、前戸商店の名前を汚す行為じゃ！ そんな不道德者は、店には向かん。帰り給え！」

だが、岡田は叱る気持ちになれなかった。何となく、この山下猛造に憎めないところがあつたのである。

「その男かね。タクシーに乗って来た丁稚というのは！」

四十の坂をとうに越した、背広姿のやや瘦身の男が、猛造を睨みつけるように立っていた。

「旦那さん……」